

## 理論(1)

### アメリカ社会学会における利他主義セクションの可能性 —P. A. ソローキンの統合主義社会学の視点—

長崎ウエスレヤン大学  
吉野浩司

#### 1. 目的

現代におけるソローキン研究は、しだいに利他主義研究へと収斂していく形で展開している。その象徴は、アメリカ社会学会におけるセクション「利他主義、道徳性、社会的連帯」の設置である(2011年8月発足)。本報告の目的は、このセクションの研究動向を明らかにするとともに、それがソローキンの視点に立ち返ることで、より豊富な結果をもたらす可能性があることを示すことにある。

#### 2. 考察

アメリカ社会学において利他主義を主たる研究対象としたのは、1950年代のP. A. ソローキンである。彼がハーバード大学に設置した、「創造的利他主義センター」が、その拠点とされた。それから半世紀を経て彼の利他主義研究が、ふたたび脚光を浴びるようになったのは、どのような理由からであろうか。利他主義セクションの趣意書によると、これまで利他主義や社会的連帯に関する研究は、必ずしも社会学の主題となつてこなかった。それは社会学が、社会にとって害を与えるような、否定的なテーマを主たる関心としてきたからに他ならない。しかし、よりよい社会へ向けて、あるいは望ましい未来に向けて、ありうべき価値観を提示するような研究も、従来の社会学のテーマに劣らず重要なテーマではないだろうか。こうして設置されたのが利他主義セクションではある。しかし忘れてならないのは、ソローキンが自らの壮大な統合主義社会学の総仕上げとして行ったのが、利他主義研究であったという事実である。

#### 3. 結論

ソローキンに立ち返ることで、利他主義セクションにいくつかの重要な視点を提供できるように思われる。設置当初から現在にいたる利他主義セクションの研究動向の調査をしてみると、利他的パーソナリティの分析、戦争と紛争の解決策の探求、グローバルな社会運動、NPOやNGOによる社会問題の解決、など多様な分野が含まれている。個別的研究としては利他主義研究を深めるものとなっていることは疑いのない事実である。しかし他方でこれら個別研究が、相互の連関にあまり考慮せずに行われているように思われる。ソローキンの統合主義社会学の視点からすると、これらの分野は、容易に結び付けられるものとなる。すなわち戦争と紛争の解決のためには、グローバルな社会運動が必要となろうし、現代におけるその主たるアクターはNPOやNGOとなる。またグローバルな社会運動のアクターの構成員は個人である。個々人が継続的に社会運動を展開するには困難がつきまとう。ある場合には途中で挫折してしまうこともあろう。利他的パーソナリティの分析の重要性はここにある。ソローキンの利他的パーソナリティ論は、利他主義者の意識構造や行為を論じるに留まるものではない。利他的行為を持続しうる可能性についても触れている。

ソローキンの利他主義研究への取り組みは、以上のようなトータルな利他主義研究を展開する上でも欠かせないものである。彼に立ち返ることで、現在の利他主義セクションの可能性はより豊かな広がりを見せるように思われる。

#### <文献>

P. A. ソローキン、1977、『利他愛』広池学園出版部。

P. A. ソローキン、1985、『若い愛・成熟した愛』広池学園出版部。

吉野浩司、2009、『意識と存在の社会学—P. A. ソローキンの統合主義の思想』昭和堂。